

---

---

# MAO FUJITA PIANO RECITAL

# 藤田真央 ピアノ・リサイタル

---

モーツァルト：ピアノ・ソナタ第10番 ハ長調 K.330

Mozart : Piano Sonata No.10 in C Major K.330

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第17番『テンペスト』ニ短調 Op.31-2

Beethoven : Piano Sonata No.17 in D minor Op.31-2

.....

ショパン：スケルツォ全曲

Chopin : 4 Scherzos

第1番 口短調 Op.20 / 第2番 変口短調 Op.31

第3番 嬰ハ短調 Op.39 / 第4番 ホ長調 Op.54

No.1 in b minor Op.20 / No.2 in b flat minor Op.31

No.3 in c sharp minor Op.39 / No.4 in E Major Op.54

---

2019年10月14日(月・祝) 14:00 開演 紀尾井ホール

2:00p.m. Monday / Holiday, October 14 Kioi Hall

【主催】 ジャパン・アーツ 【協力】 ナクソス・ジャパン

---

---

## Message

---

音楽は広い海のようにもあり、高い山脈のようにもあります。

突き詰めれば突き詰めるほど面白さは増し、果てしなさに孤独や不安をも感じます。

しかし、この音楽という空間には、ずっと昔から作曲家や演奏家がいって、コンサートを聴いてくださるお客さまがいて、今もこれからもどんどん続いていく……。そう思うと、どこからともなく喜びと勇気が沸いてくるのです。

20歳という節目の年のリサイタルには、モーツァルトとベートーヴェンのソナタ、そしてショパンのスケルツォ全4曲というプログラムを組みました。古典派からロマン派にかけて、発展的に受け継がれた音楽が、今なお愛されていることに畏敬の気持ちを抱くとともに、それを演奏し聴いていただけることが、素直にうれしいです。

藤田 真央

## Program notes

---

### モーツァルト：ソナタ第10番ハ長調K.330

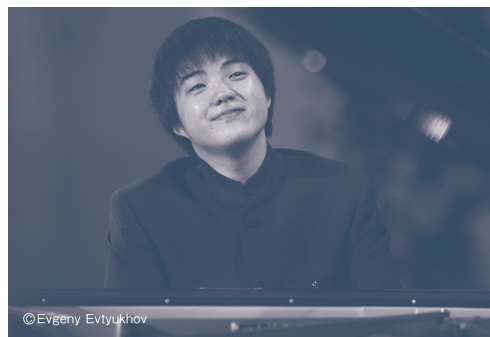
6月に行われたチャイコフスキー国際コンクールで演奏したソナタです。現地の批評家の方に「あなたは、モスクワ音楽院の先生に、モーツァルトを教えにきたんだね」と言われてびっくり！ただただ必死に弾いていただけなのですから。

一つだけ、自分の演奏の絶対条件を挙げるとしたら、ピアノの「響き」ができません。響きゆえの「間」があり、そこから表情やメロディラインが生まれます。特にモーツァルトは、シンプルなだけに表情をつけるのが難しいです。

そして矛盾しているようですが、ピアノッシモのタッチにこそ、指先に「力」が必要です。そんなピアノッシモの響きが、このソナタの第2楽章で生きてきます。

第2楽章はまさにアリアです。ハ長調ーヘ短調ーハ長調という3部形式の中間部のなかで、ほんの2小節だけ変イ長調になる瞬間があります。すぐにヘ短調へと引き戻されてしまうのですが、その一瞬にさす「光」を感じとっていただけたらうれしいです。

第3楽章は、これぞモーツァルトの真骨頂ともいべき、軽やかで柔軟なリズムです。ステージと客席の時間軸にズレが生じないように、紀尾井ホールの空間を手中に収めて弾きたいと思います。



第16回チャイコフスキー国際コンクールにて

### ベートーヴェン：ソナタ第17番『テンペスト』ニ短調Op.31-2

ベートーヴェンの常に挑戦し続ける革新性と、苦難の中にも自らを信じて歩み続ける強さを感じる作品です。音楽という道を真摯に進むことを決めた、自分自身の気持ちを表しているように感じています。

第1楽章はニ短調ですが、イ長調と思わせる分散和音で始まります。イ長調かと思ったらニ短調だった！ベートーヴェンがよくやる書法です。交響曲第1番ハ長調の冒頭もそうで、ハ長調のドミソではなく、ドミソシ(ハ長調の属七)の和音で始まり、なかなかハ長調にたどりつきません。

ベートーヴェンがこのソナタの解釈について、「シェイクスピアの『テンペスト』を読め」と言ったというエピソードも有名ですが、ベートーヴェンがどう弾いてほしいと思っていたのかは、楽譜を見ればよくわかります。たとえば、どの曲もそうですが、ベートーヴェンの楽譜には、強弱の指示が緻密に書き込まれています。それを一つ一つ読み解きながら、こういう可能性もあるよね、と客席に伝えたいです。

第2楽章もほんとうに美しいです。左右の手が交差し、右手のメロディに、左手がキラキラとグラデーションをつけていくところや、ただ和声をなぞっているだけのような、何気ない旋律の美しさに、ベートーヴェンの天才性を感じます。

第3楽章は、アレグロではなくアレグレット。8分の3拍子のテンポ感を意識して弾きたいです。アウフタクトで始まる「ラファミレ」のモチーフを何回も何回も繰り返すうちに、ヘミオラのように拍がずれてくるのも面白いところです。同じフレーズが伸びたり縮んだりしながら、横へ横へと流れていく。そして、最後のクライマックスで、ベートーヴェンはそれまでピアノで書いていたテーマをフォルティシモで書いています。何回も繰り返されている「ラファミレ」が、そこへと発展していく過程が、ベートーヴェンの推進力そのものなのだと思います。

### ショパン：スケルツォ全曲

第1番 ロ短調 Op.20 / 第2番 変ロ短調 Op.31 / 第3番 嬰ハ短調 Op.39 / 第4番 ホ長調 Op.54

ショパンは、ハイドンやベートーヴェンが交響曲やソナタに取り入れた「スケルツォ」という曲種を、独立したピアノ曲として書き上げました。4曲すべてがプレスト、4分の3拍子、3部形式でコード付き、という同じ形で書かれていますが、4曲それぞれに個性があり、またショパンらしさがあります。

ショパンって、すごく面白い人です。どの曲も、基本的な構成はとてもシンプルなのですが、ときどきフレーズのラインをぶっこわしたり、リズムの流れを断ち切ったりして、イレギュラーな要素を入れてきます。特にスケルツォは、そんなショパンの面白さが満載のジャンルなのです。

4小節単位で事が進んでいく構成なので、ショパン作品のなかでもわかりやすいのですが、その半面、同じ旋律が繰り返して出てくるので、飽きずに聴かせる難しさを痛感します。

第1番の最初の二つの和音、長いです!! 4小節にわたって、付点2分音符4個をタイでつなぐという、見た目からして長いです!

あの時代、紙は高価だったのに、ショパンは節約しようともせず、繰り返し記号も使わずに同じテーマを何回も何回も書きました。「繰り返してほしい」というショパンの気持ちが伝わってきます。

ショパンがそれ以前の作曲家といちばんちがうのは、ドラマティック度ではないでしょうか。3部形式という定型を守りながらも、繰り返すことによって抑えがたい感情をふつふつと湧き上がらせるのです。そして、中間部に流れる、故郷ポーランドのクリスマスソングのメロディの美しさ。劇的なところと優美なところの落差も魅力です。

第2番の冒頭も面白いです。ソット・ヴォーチェ（ささやくように）と書かれたユニゾンのフレーズに続いて、「ズン、チャーーン！」ですから、初めて聴いたら誰もが驚くでしょう。一度聴いたら忘れられない、でも知ってしまった以上、「あ、来る来る、キターッ！」って感じの、劇的な幕開けです(笑)。

ものすごく速い演奏もよくありますが、最初に飛ばしすぎると、途中でテンポが落ちてしまいます。自分は絶対にテンポをキープしたい派なので、しっかり手綱を引いて演奏したいと思います。

第3番も、冒頭のユニゾンのフレーズが、3拍子なのに4連符とは、面白い書法です。中間部のコラールは、高音部からキラキラと降りてくる美しいパッセージが聴きどころです。ですが、なかなか難しいので苦心のしどころでもあります。

4曲中いちばん好きな第4番は、ほかの3曲とはちがって底抜けに明るい曲想です。最初の長いモチーフがこの曲のキモで、中間部のちょっとダークな嘆きとともに、光と影の絶妙なバランスを形づくっています。

藤田真央 取材・編集:工藤啓子



第16回チャイコフスキー国際コンクールにて